

BOOK REVIEW

「中ロ国境 4000 キロ」

著者：岩下明裕

発行：角川書店（角川選書 351）

本書は中国とロシアの関係を、4千キロ超の国境を舞台に繰り広げられた歴史的局面とミクロ的交流の両面から捉えている。中ロ国境画定問題に対する学術分析の書であると同時に、著者による過去10年間の現地調査の記録が盛り込まれた力作である。

中国とロシアは現在、図們江下流からモンゴル東部国境まで4千キロを超える国境で対峙している。しかし、現在の国境が画定されるに至った歴史を紐解くと、19世紀半ばに締結された愛琿・北京両条約により中国がアムール河北岸とウスリー河東岸をロシアに譲り渡したことが21世紀まで後を引いていることが分かる。その結果、中国は日本海への直接の出口を失い、一方、沿海地方のロシア人は押し寄せてくる中国人の幻影に悩まされることになる。

著者はこの国境問題こそが中ロ関係の重要な部分を規定しており、問題は領土（国境画定）と移民というかたちで顕在化してきたとみている。そのうち移民に関しては実証的研究が多くなされており、本書の中でも実態と誇張情報が簡単に紹介されている。一方、領土問題については包括的研究が行われていないことに注目し、国境画定にあたってどのような議論が関わされ、どのようなプロセスで合意・解決を見たのかを両国の史料とインタビューに基づき調べ上げたのが本書の前半部分である。

4千キロの中ロ国境の大部分はウスリー河、アムール河、アルゲン河といった河川国境である。これらの河川には大小様々な島嶼が多数（2,444）存在し、それらの帰属問題が係争の対象となってきた。個々の島嶼の帰属に関する係争に関わる史実の検証に著者は並々な情熱を注いでいる。記憶に新しいところでは、1969年、ウスリー河のダマンスキー（珍宝）島において対立が武力衝突に発展した。日本人に馴染みの深いところでは、ハバロフスクのアムール河対岸に見えるポリショイ・ウスリースキー島が係争地である。また、陸上国境では図們江河口付近の左岸にも係争地があり、中国船の図們江航行権の問題を含め、国境画定に至る過程で様々な議論があったことが調べられている。

中ロ間の不審と対立の歴史が国境問題に凝縮されていると見る著者は、図們江地域開発の失敗の原因として、ロシアの反中国感情を第一に挙げている。ロシア側の消極的姿勢をウラジオストクやナホトカが図們江地域開発と切り離されることへの反発があったとの説を著者は採っているが、「UNDPはウラジオストクやナホトカを図們江開発に含めたが、距離が離れすぎていて経済的に一体化しなかった」のが事実であろう。

第四章からの後半は著者が足繁く国境の町を訪ね歩いた旅行記風な内容で、90年代半ば以降の両国の変化が投影されていて興味深い。中国の豊かさが辺境まで及んでいるのに対

し、ロシアのシベリアや極東が発展から取り残されている実態を垣間見ることが出来る。

黒龍江省の国境の町、綏芬河と黒河を比べ、対照的な評価を下しているのは面白い。綏芬河は街そのものを通商貿易区にし、ロシア人の担ぎ屋で賑わっていて開放的雰囲気がある。一方黒河では貿易量は頭打ちで、「金持ち」中国人が貧しいロシアの小都市に遊びに行く構図が見られ、住民感情は穏やかでない。同じ黒龍江省内の口岸都市でなぜそれほど空気が違っているのかについては著者も理解に苦しむところのようで、是非現地の人々に聞いてみたい。

北東アジアは国境が高いといわれる。実際、中ロ、中朝、朝ロ、いずれの陸上国境も検問が厳しく通過に長時間を要する。日本人などの第三人の通過を認めていない国境も多い。単純に EU の成功例を挙げて、高い国境は経済交流にマイナスだと第三人は叫ぶ。しかし、国境を巡る歴史的対立や、押し寄せてくるかもしれない不法移民の問題を抱える現地では、簡単に国境を低くすることは心理的に抵抗があるのかもしれない。陸の国境を持たない日本人には分かりにくいことだが、国境とは一筋縄ではいかないものようである。

著者は本書の中で日本人に日ロ間の領土問題を考える際のヒントを与えようとしている。中ロ間の島嶼帰属の問題を処理する上で、実施的所有と帰属の分離や共同開発を認めた例があることを指しているものと思われるが、著者自身の意見は述べられていない。読者に解決法の提起を促しているが、次は是非著者の議論を聞きたいものである。

中国、ロシア、北東アジアの国際関係に関心のある人には一読を勧めたい力作である。

(ERINA 調査研究部 主任研究員 辻久子)